



ふもと研究会

眉山のふもとで
 毎日のくらしと
 名もないドラマが
 歴史を作る

私たちはこれからの未来に
 どんなドラマを残すのだろうか

私たちは今、
 歴史から続いた一筋の道の上
 あしたという未来のふもと

研究員のふもと巡り

モラエス忌



7月1日(水)、徳島市寺町の安住寺で、82回目のモラエス忌が営まれた。モラエス忌は、「モラエス会」の方々によって執り行われてきた、伝統ある行事である。おごそかに読経が流れる中、中央にあるのはモラエスの遺影。目を見張るばかりの髭顔である。きれいに禿げあがった額とは対照的に、鼻の下から顎にかけて、見事な髭で覆われていて、只々目を引く。法要のあとは、モラエス研究の振興に尽力され、さらに精力的に出版への働きかけなどをされてきた岸積氏より講話があった。話の中で印象的だったのはポルトガルの民謡“ファド”についての思い出話だった。ファドとは『運命』や『宿命』を意味する言葉だそうだ。氏は、「ファドを聞かずに、真にモラエスの言葉を理解することはできないのではないだろうか」と語っておられた。ファド・・・それは“哀愁”だという。船乗りの、祖国を離れる者の、つまりはモラエスの哀愁。その心を持つモラエスだからこそ、『日本精神』に見られるような、日本人への深い理解につながったのではないだろうか。

私はふと、不思議な気持ちになった。ここに集まっている人々の中で、モラエスに直接関わる立場にある人はどの位いるのだろうか。私を含め、ひょっとしていないのでは？縁もゆかりもない私が、モラエス翁の写真をしげしげと眺め、焼香をし、想いを巡らしている。

徳島の小説家、佃實夫氏が『わがモラエス伝』の中で“・・・モラエスは私を捉えて離さないのだ。”と書いている。その言葉をぼんやり思い出しながら、82回目の、そして私にとっては最初のモラエス忌が終わった。

研究員 光永

*持明院②は次回お届けします。



この「ふもと通信」を
置かせてくれる場所、
配っていただける方を
募集しています！





情報の巣箱より

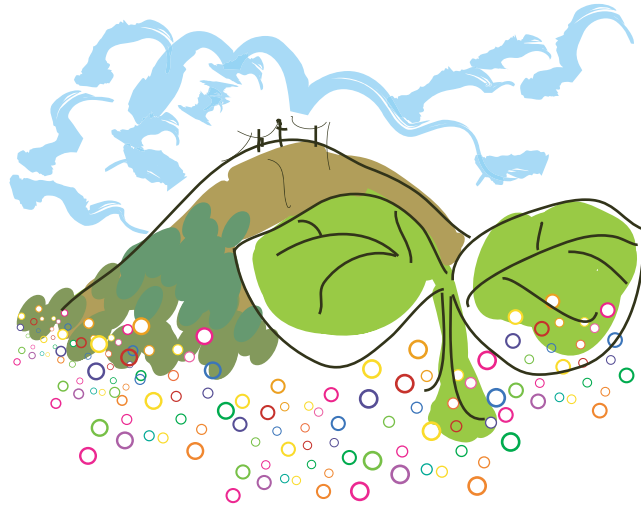
わたしと麓ふもと

vol. 09

約二万年前の旧石器時代から徳島に人が暮らしていたという新聞記事を見て、その頃から眉山はあつたのかしら、などと想いを巡らし歴史を感じた。私たちの小さな生活も宇宙の歴史の一コマとしてあることを、少し不思議に感じながら。

子供たちはすっかり成長し今では子育て真っ最中。時は巡る。ひとつのバトンタッチを済ませた感がある。

仕事もバブルがはじけて静かになり、この仕事に出会えた幸せ、多くの人と関われることへの幸せに感謝しながら、いよいよ人生の最終章に入っている。まだ夢のひとつ、ふたつ持っているが、そのうちのひとつに、眉山の南側の遊歩道が、ハーブ園になってくれたら……との十年來の想いがある。発信はしていないので実現不可能かもしれない。



しかし、ハーブは人を楽しませ、憩わせ、癒してくれる。また、大勢の人を呼ぶこともできると思う。叶わぬ夢かもしれないが、この想い、誰かが受け取ってくれれば、と思っている。

アロマテラピースクール

「カラザ」

金森弘華

学生支援室だより

No9

7月半ば、梅雨真っ盛り。じめじめ、蒸し蒸しな陽気に、夏本番を前に既にバテそうな私ですが、社会人の方々はいつも元気はつらつとしていらっしやいます。ヨガを30年以上実践されている方、冒険家として世界中を廻られた方、珍しい蚕を育て、繭作りに夢を馳せていらっしやる方、留学生さんたちに熱心に日本語を教えてくださいださっている方、たくさんの本を読まれ、どんなことに関してもご自分の意見をきちんと持っていらっしやる方……どの方も生き生きとされていて、その背中を拝見させていただきだけで、刺激を受ける毎日です。

そんな影響を受けているのは私だけではないようで、一緒に受講している学生さんからは“いくつになっても夢を持ち、諦めないで挑戦していくことの大切さを学んだ”、“異なった価値観に触れ、人生観が広がっていくのを感じた”などの感想が寄せられています。そして逆に、社会人の方からは、学生さんの瑞々しい感性や率直な意見にハッとさせられた、そんな経験を聞かせていただいています。学生さんと社会人のみなさんが共に学ぶ意味がここに感じられます。

10年後、20年後……、ここに通われる社会人の方々のように元気な自分でいられるよう、学生さんに元気を分けられる女性でいられるよう、まずは日々大切に過ごしていきたいと思えます。



学生支援室 Tel:088-656-7205

HP :<http://w3.ias.tokushima-u.ac.jp/sgp>